

ブラジル児童に対するサイ能力誘発訓練の試み

(Application of Psi Inductive Training for Brazilian Children)

小久保秀之¹、Fabio Eduardo da SILVA²、Sibele PILATO²、Reginaldo HIRAOKA²、山本幹男¹
(Hideyuki KOKUBO¹, Fabio Eduardo da SILVA², Sibele PILATO²,
Reginaldo HIRAOKA² and Mikio YAMAMOTO¹)

1. 国際総合研究機構 (日本, 千葉)
2. 統合的スピリチュアリスト大学 (ブラジル, クリチバ)

要旨: 1980年代に中国で開発されたサイ能力誘発訓練を、ブラジルの児童 11名に適用した。この誘発訓練は、丸めた紙片に書かれた文字・図形を標的とする自由応答型の訓練であり、中国の雲南、北京、上海で盛んに実施され、優れた能力者の育成に成功したといわれている。今回、筆者らは雲南大学の手法に基づき、非漢字圏であるブラジルの児童に誘発訓練を行った。また、訓練中の物理乱数発生器の出力異常の有無も調べた。訓練回数が2回であったこと、少人数集団であったことから、能力開発成果を確認するには至らなかったが、訓練法自体は標的作成を工夫すれば非漢字圏の被験者にも適用できると判断された。

Keywords: guess, training, Brazil, child, recognition, clairvoyance, psi

1. はじめに

1980年代に中国で開発されたサイ能力誘発訓練を、ブラジルの児童 11名に適用した。この誘発訓練は、丸めた紙片に書かれた文字・図形を標的とする自由応答型の訓練であり、中国の雲南、北京、上海で盛んに実施され、優れた能力者の育成に成功したといわれている¹⁾。今回、筆者らは参考にしたのは、雲南大学人体科学研究室で用いられていた選抜テストの手法である²⁾。

の実験が行われる。雲南大学では、被験者を確保するために、年 1、2 回小学生を対象に選抜テストが行われていた。1997 年までに約 50 人が選抜・訓練され、そのうちの 30%ほどの被験者で高い能力の開発に成功したという。

この訓練で使用する標的は、次のように作成された。4cm×5cm ほどの大きさの紙の 1 隅に、1cm 角ほどの大きさで文字、数字、記号など思いついたものを書き、次に、それに色を変えた記号や数字などを書き加える (Fig. 1)。色は、赤・

2. 訓練手法²⁾

雲南大学の被験者選抜・訓練は、次の 3 段階を経る。第 1 段階：まず多数の未経験児童から有望な被験者を選抜する。第 2 段階：選抜した被験者を対象に、さらに 1 ヶ月に 4~6 回の訓練を実施し、安定的に能力が発揮できるようにする。第 3 段階：実験目的に合わせた能力を訓練する。第 1 から第 3 段階の訓練を経た後、厳密な管理条件下

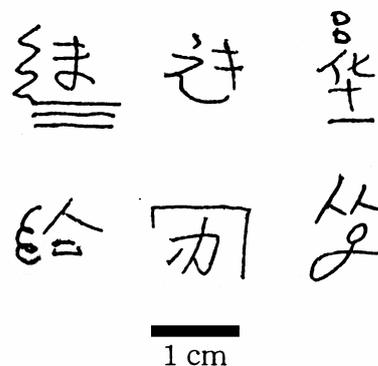


Fig. 1 標的の例

青・黒。作業効率を高めるために、まず1人が赤で文字を書き、別の者が黒で記号を書き加えるなど、作業を分担する。標的の記入が済むと、標的の書かれた1隅が中心になるように、紙を固く丸める。

小久保・山本が1997年に視察した約2時間の選抜テストは²⁾、雲南市内の龍翔小学校にて、通常の授業の最終時限を利用して、第1学年の1クラス51人を対象に実施された。

まず、最初の20分間で、羅が実験の概略・留意点等を説明し、簡単なリラクセス動作を行わせる。次に、実験者が、子供の耳に1つずつ標的を入れ、回答用紙を配布する。筆記具は子供が所有しているカラーサインペン等を用いる。子供は標的に記されたものを透視するよう意識集中する。実験中、実験者は、教室の前方から生徒に気を送る動作を時折行う。標的配布後10数分で、挙手する子供が出る。実験者はその子供のところに行き、回答を確認した後、標的を耳から取り出して展開し、フィードバックを与える。実験者は、標的を回答の近くに糊付けした後、新しい標的を子供の耳に入れる。

この選抜テストの結果は、有効回答用紙51枚、総試行数は179試行（無回答も1試行とみなす）、1人当たりの試行数は平均3.5試行（最高10試行）、また、1試行当たりの所要時間は平均約25分であった。的中・非的中の判定は、実験者がその場で判断するが、このときの雲南大学の研究者、羅・朱の判定では、的中数3が1名、的中数2が3名、的中数1が9名で、合計13名が的中結果を示した(Fig. 2)。総的中数は18で、総試行数に対する的中比は0.1であった。羅・朱によれば、この結果は、全体としてあまり良いものではないとのことであった。



Fig. 2 回答例

3. 本訓練法の特徴

この訓練に使う標的は、文字・記号・数字を組み合わせたものであるが、基本となるのは文字（漢字）である。通常の認知課題の場合でも、知らない文字の認識はむずかしいので、本訓練の標的にもよく使われる平易な字を選ぶ必要があるが、日常的に使われる漢字だけでも数1000種ある。さらに数字や記号を書き添えたり、色を変えることで、標的の種類を数倍増やすことができる。標的の種類が多いほど、被験者の推測結果と標的との一致・不一致を判定しやすい。また、偶然に完全的中する確率が小さいため、一致度が高い場合には、被験者の自己の能力に対する確信が深まり、興味・関心が増大する。これは一致が部分的な場合も同様である。

訓練課題は標的の推測（透視）であるが、この訓練によって能力が開発されてくると、透視能力だけでなく、他のpsi関連能力やマクロPK能力も開発されるといわれている。たとえば、中国上海・復旦大学のYuらは、1988年、訓練の終わった被験者に電卓を想起させる実験を行った¹⁾。被験者は事前に電卓の実物を見せられ、キーを押すと表示画面に数字が出現することだけを教えられた。その後、被験者は電卓のイメージを想起し、そのイメージの電卓のキーを押したときに表示される数字を答えるよう指示された。3桁の整数の掛け算、および3桁の整数の平方根を求める課題に対し、掛け算は有効数字6桁、平方根は有効数字8桁の正答が得られた。8桁は電卓の最大表示桁数であった。これは、推測（透視）訓練の結果、サヴァン症候群の者に見られるのに類似した特異な計算能力が開発されたことを示している。なお、この実験の被験者は中学校卒業後に上海に上京した地方出身者であり、実験が行われるまで電卓を見たことがなかった。

本訓練では、1試行に20分程度を費やす。試行中、被験者はただひたすら標的を推測するだけである。他の活動をせずに推測活動だけを20分持続するのは、意外にむずかしい。このため、大人よりも子供の方が本訓練に適しているといわれている。

本訓練では、標的の紙を丸めて耳に入れる。耳である必然性は特にないので、標的を手で直接握ってもよい。ただし、手に握った場合は、試行中に標的が手からこぼれて紛失する確率が大きく

なる。また、小型の容器に標的を入れて握ってもよいが、直接標的に触った方が情報を読み取りやすいと感じる被験者が多いので、容器はあまり使われない。

本訓練は厳密な標的管理を行わないので、被験者が詐術を用いることが可能である。特に、第1段階の選抜テストは被験者が多く、監視の目が行き届かず、不正を行う児童が選抜されてしまう場合がある。しかし、このような被験者は、人数の少なくなる後の訓練段階で排除可能である。また、経験的に、不正を行う子供を無視して他の子を誉めるようにすると、不正を行わないように子供の方から態度を改めてくると言われている。仮に訓練段階で不適切な被験者を排除し切れなかったとしても、訓練後に行う実験が適切に管理されるなら特段の支障はない。したがって、本訓練では厳密な実験管理よりも、リラックスした雰囲気作りや励まし・動機付け、あるいはパチェルダー効果³⁾が重視される。

4 ブラジル児童への適用

本訓練を、非漢字圏であるブラジルの児童に適用した。漢字が使用できないため、アルファベットを組み合わせた、簡単な線画を用いた。

4-1. 標的 白色の薄い柔らかな紙を 5cm×5cm ほどの大きさに切って標的用紙とした。この紙片の1隅に、1cm 角ほどの大きさで文字、数字、図形を書き、次に、それに色を変えた文字、数字、図形を書き加えた。色は、赤・青・黒・緑を使用した。Fig. 3 に標的の例を示す。標的の記入後、標的の書かれた1隅が中心になるように、紙を固く小さく折り畳んだ。標的は訓練日までに、小久保が 50-70 個作成した。



Fig. 3 標的の例

4-2. 被験者 ブラジル・クリチバ市の統合的スピリチュアリスト大学付属 Andre Luz 中学校の児童 11 名 (男 5 名、女 6 名、10-14 歳)。

児童はすべて同じ教室の児童。1 回目は 11 名、2 回目は選抜した 5 名 (男 2 名、女 3 名) で訓練を実施した。

4-3. 訓練日時・場所 2004 年 9 月 16 日、21 日。午後 2:00 過ぎより 1 時間半程度。1 回目は、ブラジル・クリチバ市の統合的スピリチュアリスト大学のヨガ実践場にて、2 回目は同大学のガンツフェルト実験室にて行った。

4-4. 手続き 最初に指示を約 10 分行った。特に 2 回目の訓練では、スクリーン効果の説明を行った。指示後、準備動作として深呼吸・マッサージを行い、回答用紙とカラーサインペンを配布した。回答用紙に記名させた後、実験者は各被験者の右耳に標的紙片を 1 つずつ入れた。各被験者は標的に意識集中し、何らかのイメージを得たら、それを回答用紙に記入した。記入後、無言で挙手した。実験者は被験者の耳から標的紙片を取り出し、被験者の目前でそれを開き、回答用紙に糊付けした。その後、新たな標的紙片を 1 つ被験者の耳に入れた。訓練中、標的とよく一致した回答 1 例を各被験者に示し、励ました。

指示開始から約 1 時間経過した時点で回答用紙を回収した。そして、被験者を集めて全員の結果を見せた。

4-5. フィールド RNG 物理乱数発生器 (Orion V.1.2.1) 2 台を、USB-RS232C 変換アダプタ (IO データ、USB-RSAQ2) を介してコンピュータ (Panasonic、CF-W2) に USB 接続した。乱数発生器は、指示の前に fred.exe (V.1.0) によって 2000bits/s で作動させた。訓練時間中、乱数発生器は訓練現場に置かれた。訓練終了後も乱数発生器をガンツフェルト実験室で継続作動させ、対照データを取得した。

5. 結果

訓練 1 回目は 52 試行実施し、1 試行当たり平均 8.5 分、2 回目は 41 試行で 1 試行当たり平均 4.9 分であった。時間経過を Table 1 に示す。

標的との類似性が高い回答、あるいは類似性が感じられる回答は、各訓練とも 4・5 例であった。Fig. 4 にその例を示す。

Table 1 訓練の時間経過

経過時間	2004年 9月16日	経過時間	2004年 9月21日
0:00:00	指示開始	0:00:00	指示開始
0:10:50	課題開始 (14:33:10)	0:12:17	課題開始 (14:33:25)
0:50:56	課題終了 52 試行	0:59:17	課題終了 41 試行
1:07:48	実験終了	1:06:32	実験終了

6. 考察

この訓練は、通常、初期段階では 40 名ほどで一斉に訓練する。人数が多いほど一致性の高い回答が発生する頻度が高いからである。しかし、今回は通常の約 3 分の 1 の人数であったため、一致回答も少なく、また、集団的な高揚感もあまり顕著でなかった。今後、少人数で実施する場合のノウハウを整備する必要がある。

標的図形の作成は、漢字・ひらがな・カタカナが使える日本人被験者に比べ、使用できる文字の種類が限られている分だけむずかしかった。この困難は、簡単な線画を標的に多用することで、ある程度解決できるだろう。

また、通常、標的は最初の人を書いた図形に別の人間がさらに図形を書き加えるというように数人がかりで作成するが、今回は本訓練手法に熟知

フィールド RNG データは、RNG 起動時からの訓練終了のコメントを入力をするまでを訓練期間データ、それ以降のデータすべてを対照データとした。1 回目の訓練において、1 台の RNG で、 (Z^2-1) の累積値が 5%有意（片側）に近い値となった（Table 3, com5E）。

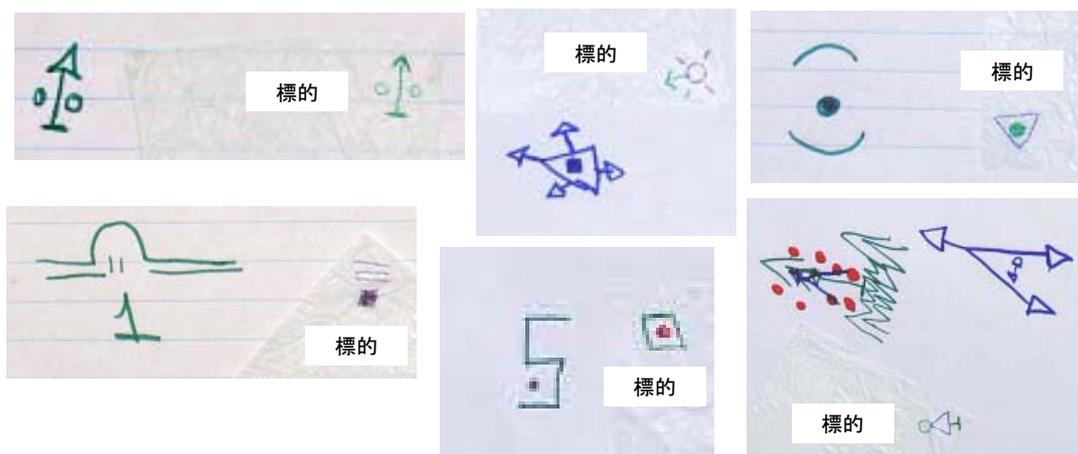


Fig. 4 類似性の高い回答の例

Table 2 累積偏差

	データ名	n	score	累積偏差	z
訓練 1 回目	com4E	8842000	4421567	567	0.381
	com5E	8908000	4451845	-2155	-1.444
対照	com4C	10488000	5242969	-1031	-0.637
	com5C	10148000	5076598	2598	1.631
訓練 2 回目	com4E	8696000	4347087	-913	-0.619
	com5E	8638000	4320113	1113	0.757
対照	com4C	8284000	4142029	29	0.020
	com5C	8332000	4164124	-1876	-1.300

Table 3 (Z^2-1) の累積値

	データ名	n	Z^2-1 の累積	5%点
訓練 1 回目	com4E	4421	28.536	155.383
	com5E	4454	155.536	156.290
対照	com4C	5244	-85.768	170.083
	com5C	5074	30.156	167.115
訓練 2 回目	com4E	4348	-20.668	154.439
	com5E	4319	-75.436	153.932
対照	com4C	4142	6.452	150.837
	com5C	4166	28.628	151.241

* 5%点（片側）は Excel で計算。計算不能点は外挿で算出。

する実験者が1人だったため、全標的を1人で作成した。可能な限り異なる標的を作るよう努力したが、被験者の回答と比べると、直線を構成要素に持つ標的が多かった。誘発効果を高めるという点では、花びらやハートなど丸みのある標的の割合を増やすべきだったと思われる。

1 試行当たりの平均所要時間 5~9 分は、中国の小学生の所要時間 25 分の半分以下である。この違いは、主として、小学校第 1 学年（中国）と中学生（ブラジル）という年齢の違いによるものと考えられる。また、中には、次々と思いつく図形のイメージを片っ端から描き並べる子もいた。これは、課題の意図を十分に理解させられなかったことを示しており、これも平均所要時間の差の理由の 1 つに考えられる。

全般に、この訓練に対する被験者の関心は高く、取り組みも熱心であった。日程の都合で 2 回しか実施できなかったため、能力開発の成果を確認するには至らなかったが、訓練法それ自体は非漢字圏の児童にも適用可能と判断される。

RNG データは、一部で 5%有意に近い値が得られたが、全体として顕著な異常は見られなかった。もともと本訓練は被験者個々人が意識集中するタイプであるので、集団の注意が 1 点に集まり、ある種の感覚を共有するというフィールド RNG 実験の要件を満たしにくい。したがって、RNG の異常が期待できるのは、一致回答が頻発して集団の高揚感が著しく高まるか、集団の中に能力者が混じっていた場合である。訓練中の雰囲気、また個別被験者の的中度からは、今回はそのいずれの場合にも該当しなかった。なお、この被験者集団の訓練をさらに継続した場合、訓練回数の増加に伴って RNG 異常の出現頻度が増加するかどうか興味深い問題である。

7. 結 論

中国で開発されたサイ能力誘発訓練を、ブラジルの児童 11 名に適用した。訓練回数が 2 回であったこと、少人数集団であったことから、能力開発成果を確認するには至らなかったが、訓練法自体は標的作成を工夫すれば非漢字圏の被験者にも適用できると判断された。

謝 辞

本研究の実施にあたり、Andre Luz 中学校（ブラジル・クリチバ市）の生徒・教員の協力を得ました。また、統合的スピリチュアリスト大学より援助を受けました。御礼申し上げます。

参考文献

- 1) Yu H, Shao L, Sun Y and Fang L: The experimental research on extraordinary power of human body - Conductive training of ESP and PK to young people, *Journal of International Society of Life Information Science*, **16**(1):120-132, 1998.
- 2) 小久保秀之、山本幹男：雲南大学における特殊生体機能実験の被験者選抜手続き、*超心理学研究*, **4**(1)、3-11, 1999
- 3) 笠原敏雄：*超心理学ハンドブック*、東京：ブレーン出版、185-186, 1989.
- 4) 小久保秀之、F. E. da Silva、S. Pilato、R. Hiraoka、山本幹男：ブラジル児童に対するサイ能力誘発訓練の試み、*超心理学研究*, **8**(1&2): 47-50, 2004.